モデスト・ペトロビチ・ムソルグスキーの「展覧会の絵」に関する一考察

教科・領域教育専攻
芸術系（音楽）コース　　指導教官　森　正
竹　村　　佳　子

【 演奏曲目：ピアノ独奏 】

Modest Petrowitsch Mussorgski
モデスト・ペトロビチ・ムソルグスキー作曲
「Bilder einer Ausstellung」
「展覧会の絵」
「**Promenade**(プロムナード)」～「**Gnomus**（グノーム）」
「**Promenade**（プロムナード）」～「**Il vecchio Castello**（古い城）」
「**Promenade**（プロムナード）」～「**Tuileries**（チュイルリー）」
「**Bydło**（ビドロ）」
「**Promenade**（プロムナード）」～「**Балет невылупившихся птенцов**（卵の殻をつけたひなどりのバレエ）」～「**Samuel Goldenberg und Schmuÿle**（サミュエル・ゴールデンベルクとシュミュイレ）」
「**Promenade**（プロムナード）」～「**Limoges**（リモージュ）」～「**Catacombae**（カタコンブ）」～「**Con mortuis in lingua mortua**（死せる言葉による死者への話しかけ）」
「**Избушка на курьих ножках**（鶏の足の上の小屋）」～「**Богатырские ворота**（キエフの大きな門）」

はじめに

1874年早春、モデスト・ペトロビチ・ムソルグスキー（Modest Petrowitsch Mussorgski 1839～1881）にとって友人であったヴィクトル・アレクサンドロヴィッチ・ハルトマン（Victor.A.Hartmann 1834～73）の死を悼んだ遺作展覧会が、ペテルブルグ美術アカデミーで催された。この遺作展覧会では、およそ400点に上るハルトマンの美術作品が展示された。ムソルグスキーは、ハルトマンの美術作品をモチーフにして、ピアノ組曲『展覧会の絵』を作曲した。

一般に純音楽の作品には、「絶対音楽」と「標題音楽」とがあるといわれている。すなわち、その作品がほかの芸術分野と提携することなく、音の相互関係のみによって、形式美を追求し、思想、感情などが秩序ある音の構成によって表現された音楽を「絶対音楽」といい、これに対して、「標題音楽」とは、文学、美術、演劇、映像、または風景の描写などにマッチした標題と内容をもった音楽のことをいう。

後者の「標題音楽」に我々が接する時、その作曲者の音楽をより深く捉えるために、作曲者自身の言葉やエピソード、その曲のもとになった詩、物語、劇、小説等の内容を予備知識として胸の中に収めておくことは大切であると考える。

研究の目的

本解説書では、標題音楽である、ピアノ組曲『展覧会の絵』を演奏するための手がかりとなるような音楽的解釈を検討し、楽曲分析を行い、演奏表現上のあり方を探求することを目的とした。

解説書の概要

第一章、第一節においては、ハルトマンとの関わりによって作曲されたピアノ組曲『展覧会の絵』の創作活動の経緯を概観した。ムソルグスキーがハルトマンの死を悼み、その才を惜しむ姿から、二人の固い友情を確認できた。第二節においては、この『展覧会の絵』が作曲されるもととなったハルトマンの絵について考察した。第三節においては、絵の舞台となった国を確認した。第二節、第三節において、ハルトマンの絵についての情報を集めることにより、この組曲のもととなった絵を予備知識として捉えることができた。そして第四節においては、組曲『展覧会の絵』に題名を連ねている１０の標題の持つ意味を考慮しながら、楽曲分析を行い、作品全体を概観した。これらの考察を通して、ムソルグスキーは、ハルトマンの作品を描写風に音楽化したのではなく、その作品を膨らませ、そこに、ハルトマンの死への悲しみを織り込みながら幻想的に描いたと考えた。つまり、この作品は、ムソルグスキーのハルトマンへの友情と追憶の心によって書かれた、挽歌であると推測した。これらのことを筆者は、組曲全体における内面的コンセプトとして捉え、自身の演奏において生かせること目指した。第二章、第一節においては、ムソルグスキーの音楽をより深く追求するため、彼が作曲した他の音楽作品全体を概観した。第二節では、『展覧会の絵』に重点をおき、ムソルグスキーの音楽的特徴を和声、リズム、旋律の観点から検討した。

おわりに

ムソルグスキーに関する伝記的知識や日本と異なる自然、社会、文化などを感性で認識し、胸の中に収めておくことは、豊かなイメージを生み出す上で大切な作業であるだろうという考えの下、本研究を行った。しかし、音楽とは、純粋に音そのもの、また、様々な音の重なりやフレーズから成立しているものである。ピアノ組曲『展覧会の絵』のように、視覚的イメージを持つ楽曲を演奏する時、その情景などを思い描くことはもちろん重要なことだが、それを純粋な音楽として直接再現することは困難である。なぜなら、視覚的イメージと音楽を直接結び付けようとした時、音楽はその自発的な発展の力を失い、まるでピンでとめられた蝶の群の標本のように、一つひとつは美しいが生命力のないものになってしまうと考えるからだ。

大曲、ムソルグスキーの作曲したピアノ組曲『展覧会の絵』は、研究をしていく度に新たなる発見を見出すことが出来る。先に述べた、ムソルグスキーに関する伝記的知識や日本と異なる自然、社会、文化などを感性で認識した上で、楽譜から作曲者の意図を読み取ることは、演奏を追求する上で重要なことである。今後の課題としては、彼の音楽に影響を与えた作曲家や、逆に彼の音楽が影響を与えた作曲家にも目を向ける等、別の視点から新たに大曲『展覧会の絵』を捉え直し、彼の音楽の本質を追求していきたい。そして、一層深い表現をするために必要な演奏技術も同時に追求していきたい。